別記様式第４号（その２）

（用紙　日本工業規格Ａ４縦型）

教　育　研　究　業　績　書

2016年8月31日

氏名　　小泉　誠　　印

研究分野	研究内容のキーワード
臨床心理学	ナラティヴ、思春期青年期、非行と攻撃性

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
1　教育方法の実践例		
2　作成した教科書、教材		
3　教育上の能力に関する大学等の評価		
4　実務の経験を有する者についての特記事項	2011年4月1日 ～2016年3月31	神戸大学大学院臨床心理学コースの大学院生に対する学校実習指導を担当。
5　その他	2010年4月1日 ～2011年3月31日	神戸大学大学院人間発達環境学研究科発達支援インスティテュートの心理教育相談室紀要を創刊にあたり、執筆要項考案に関わり、相談室紀要発刊の事務的な仕事に携わる。

職務上の実績に関する事項

事項	年月日	概要
1　資格、免許	2010年4月1日 2009年3月31日	日本臨床心理士(21909)資格取得 広島大学大学院　修士（心理学）
2　特許等		
3　実務の経験を有する者についての特記事項	2008年4月1日 ～現在	臨床心理士資格取得以前から、精神科病院で臨床実践に関わる。資格取得後も、精神科、児童精神科、児童養護施設、学校、教育相談センターなど様々な施設で臨床実践に携わっている。この間ほぼフルタイムと同様の臨床実践経験を積んでいる。 業務内容についても、心理療法を中心に、プレイセラピー、グループセラピー、心理アセスメント、訪問カウンセリング、スクールカウンセリング、デイケア業務と多岐に渡る。学校臨床、病院臨床、児童福祉臨床の各領域で５年以上の非常勤での臨床経験を有する。
4　その他		

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
（著書） 1 2 3				
（学術論文）				

1.重度の身体障害を持った男性との心理面接過程	単著	2013年3月	神戸大学大学院人間発達環境学研究科発達支援インスティテュート心理教育相談室紀要第3巻pp.16-23	呼吸器官に重度の障害を負った中年男性に対して行なった心理療法事例。障害の契機となった職場への被害妄想的な訴えを繰り返す中で、面接場面で「話をちゃんと聴いていない」セラピストに対して怒りを向ける。怒りを契機にクライエントにとって面接空間が安全／安心を確保できなくなると、「先生の目が怖い」と訴え、中断となった。クライエントの抱える障害とやり場のない怒りを心理療法場面でどのように受け止めるのかを考察している。
2.ひきこもりの不登校中学3年生男児との訪問面接過程Ⅱ―本人との継続的な面接が難しいケースへの対応―	単著	2012年3月	神戸大学大学院人間発達環境学研究科発達支援インスティテュート心理教育相談室紀要第2巻pp.29-39	小泉（2011）の訪問面接の事例研究は、週一回本人と面接し、面接関係を形成していった事例である。しかし実際の訪問面接では、本人に毎回会えるとは必ずしも限らない。本研究では訪問面接に対して抵抗を感じ、定期的な面接ができなかった事例を挙げ、クライエントに対する接し方の留意点やクライエントの母親を支える重要性について述べた。
3.ひきこもりの不登校中学3年生男児との訪問面接過程	単著	2011年3月	神戸大学大学院人間発達環境学研究科発達支援インスティテュート心理教育相談室紀要第1巻pp.37-44	ひきこもりの心理支援では、クライエント来談型の心理面接のみでは対応は不十分であり、訪問型の心理面接などアウトリーチ支援が求められる。本研究では、中学生の不登校引きこもりの事例を提示し、通常のカウンセリングとは異なる流動的で不安定な特徴を持つ訪問面接のプロセス及び面接構造を考察した。
4.試行カウンセリング9事例におけるナラティヴ・プロセス―Narrative Process Coding Systemを用いた検討―	共著	2011年3月	神戸大学発達・臨床心理学研究第10巻（査読有）pp.41-48	全編編集執筆を担当。本研究は、クラエントとセラピストによる語りの共同生成過程をナラティヴ・プロセスとし、試行カウンセリング場面におけるその構造を検討した。結果、ナラティヴの量的な変化が示され、面接の進行に伴い、一つの話題に詳細に取り組むようになるという臨床感覚を支持する結果となった。またナラティヴ・プロセスは面接の進行とともに、外的事象の語りが減少し、内省の語りが増加することが示された。（共著者；小泉誠・岡本祐子・森岡正芳）
5.自分を語ることが難しい思春期男児との心理面接過程	単著	2010年3月	心理教育相談事例研究第8巻pp.17-24	思春期の子どもは自身の体験や内面を面接の場面で表現することが難しいことが多い。本事例のクライエントも面接場面での緊張感が高く、当初は自発的な語りはほとんどなかった。しかし、治療的なテーマとは異なる彼の興味関心を話題に取り上げたことで、クライエントは自身の体験を少しずつ表現していった。本事例を基に、臨床における思春期のクライエントの語りの特徴とセラピストとしての聴き方を考察した。
6.短期心理面接場面におけるナラティヴ・プロセスの検討（修士論文）	単著	2009年3月	広島大学大学院	本研究は、クラエントとセラピストによる語りの協同生成過程をナラティヴ・プロセスとし、短期心理面接場面におけるその構造を検討することを目的とした。心理面接は、非臨床群の大学生9名に筆者が1回50分を10回行った。面接記録を外的、内的、内省的の3つの語りにコード化するAngus et al.(1999)のNarrative Process Coding Systemに基づき分析し、ナラティヴ・プロセスの量的・質的な変化について考察した。（全頁数76頁）
（その他）				
1.不適応行動がみられる児童擁護施設入所児童への集団療法その4-特色あるグループへの実施とその課題	共著	2015年9月	日本心理臨床学会第34回秋季大会（於神戸国際会議場）	「男子グループワーク」の方法、考察の執筆、および発表を担当。継続的に報告してきた施設内グループセラピーの実践例について、継時的な観点から5年間のプロセスを提示し、その治療的な効果と今後の課題について考察した。特に男子グループでは、居室内での暴力行為が問題になり、怒りの表出について課題とされいた。4年間通して行なわれた怒りをアサーティブに表出するトレーニングの結果、男児の中で自身の行動の振り返りだけではなく、「大人に話す」「その場から離れる」といった解決策を自ら見出す力を養う結果が得られた。（共著者；中植満美子・小泉誠・本田浩子）（全頁数1頁）
2.大学生女性への心理療法のナラティヴ・プロセス-10回の短期面接データの質的分析-	単著	2014年10月	日本質的心理学会第11回大会(於松山大学)	小泉・岡本・森岡(2011)で試行カウンセリング9事例のうち最も内的、内省的な語りが豊かであり、実際の心理療法場面に近い事例を取り上げ、10回分すべてを面接記録にNPCS(Angus et al, 1999)を用いたコーディングを行った。さらに、その心理療法プロセスを質的に分析した結果、大学4年生の進路の岐路に立っているクライエントの母親への依存と自立の葛藤という内容の分析とともに、内的、内省のモードがどのような形式、構造で生じるのかをクライエントとセラピストの共同生成の観点から考察した。（全頁数1頁）

3.不適応行動がみられる児童擁護施設入所児童への集団療法その3-施設内での集団療法実施に求められる要因とその課題	共著	2014年8月	日本心理臨床学会第32回秋季大会（於パシフィコ横浜）	「男子グループワーク」の方法、考察の執筆、および発表を担当。児童福祉領域でのグループセラピーの事例について継続的な支援の在り方について発表している。本研究の小学生男児グループでは、性暴力を特に取り上げている。この時期、男児メンバーに性暴力被害があり、その体験から低学年児童に連鎖的に性暴力加害が懸念された。このため、その心理的ケアと並行して、予防的な性問題の心理教育をワークアレンジとして導入した（共著者；中植満美子・小泉誠・本田浩子）（全頁数1頁）
4.不適応行動がみられる児童擁護施設入所児童への集団療法その２-施設内での集団療法実施に求められる要因とその課題	共著	2013年8月	日本心理臨床学会第32回秋季大会（於パシフィコ横浜）	「男子グループワーク」の方法、考察の執筆、および発表を担当。中植・小泉・本田(2012)を受けて、特に施設内でグループセラピーを行なう際に必要となる施設側への理解やマンパワーの割当などを本事例から紹介し、施設内グループセラピー実施に必要な要因とその課題について考察した。小学生男児グループでは、ネグレクトなど被虐待体験を持つ児童たちに対し、自己肯定感を高めるためのワークを導入した。それを居室担当スタッフとともに実施することで、生活全体に反映される試みを紹介している。（共著者；中植満美子・小泉誠・本田浩子）（全頁数1頁）
5.不適応行動がみられる児童擁護施設入所児童への集団療法-対象集団に応じたワークのアレンジ・開発とその課題について	共著	2012年9月	日本心理臨床学会第31回秋季大会（於愛知学院大学）	「男子グループワーク」の方法、考察の執筆、および発表を担当。本研究において、施設児童を居室単位でグループ構成し、各対象集団に見られる問題に応じて既存のワークをアレンジ、問題行動の振り返りや不適応行動の予防のためのワーク開発を行った。拙者は小学校男児グループを担当し、グループワーク中もトラブルや衝突してしまう攻撃性の高い児童らが、徐々に安定して共同遊びが可能になり、怒りの感情表出を振り返る過程を提示した。（共著者；中植満美子・小泉誠・本田浩子）（全頁数1頁）
6.心理療法における内的ナラティヴの生成とその特徴について	単著	2011年11月	日本質的心理学会第8回大会（於安田女子大学）	本研究では、小泉・岡本・森岡（2010）の中で内的ナラティヴに焦点を当て、「時間性・事例性」「共同生成性」「セラピストの役割」の観点から分析した。結果、感情の明確化、具体化のみならず、セラピストはクライエントの感情の語りをそのまま「コーラス」することで内的ナラティヴが促されることが示唆された。また内的ナラティヴの生成は、セラピストの介入だけではなく、クライエントの沈黙から生じることが明らかになった。（全頁数1頁）
7.内省的ナラティヴの特徴と構造－試行カウンセリング9事例を用いた検討	共著	2011年9月	日本心理臨床学会第30回秋季大会（於九州大学）	全編編集執筆を担当。本研究では、小泉・岡本・森岡（2010）の試行カウンセリング事例の語りの中から、意味生成のプロセスである内省的ナラティヴを取り上げ、その特徴と構造を検討した。結果、内省的な語りが繋がり、意味付けが深まる過程では、特定の対象ではなく、自己を中心に他者あるいは他者との関係など多様な内省対象が見られた。また、すぐに意味付けをするのではなく、「気づき」の過程を経ることで、内省的な語りが促進されることが示唆された。（共著者；小泉誠・岡本祐子・森岡正芳）（全頁数1頁）
8.試行カウンセリング場面におけるナラティヴ・プロセス―Narrative Process Coding Systemを用いた検討―	共著	2010年11月	日本質的心理学会第7回大会（於茨城大学）	全編編集執筆を担当。本研究は、試行的カウンセリング9事例のトランススクリプトをNPCSに基づき分析し、我が国におけるナラティヴ・プロセスの検討を行った。結果、語りの話題数は面接の進行につれて減少し、プロセスにおける面接の深まりが示唆された。本発表では、コーディングした語りを具体例として提示し、NPCSの有用性と限界について検討、討議した。（共著者；小泉誠・岡本祐子・森岡正芳）（全頁数1頁）
9.大学生の境界例心性と母子関係の語りに関する研究	共著	2007年11月	日本青年心理学会第15回大会（於広島大学）	全編編集執筆を担当。研究1において、質問紙により大学生の境界例心性の実態と様相の調査を行った。統計的分析から女子学生が男子学生より境界心性得点が有意に高く、境界例は女性に多いという臨床現場の報告を支持する結果となった。研究2では境界例心性得点の高群と低群にわけ、該当学生に面接調査を行い、境界例心性と母子関係の関連性を検討した。結果、高群では、母親に対する不満や葛藤を低群より抱いている可能性が示唆された。（小泉誠・岡本祐子）（全頁数1頁）

３　「研究業績等に関する事項」には，書類の作成時において未発表のものを記入しないこと。
４　「氏名」は，本人が自署すること。
５　印影は，印鑑登録をしている印章により押印すること。ただし，やむを得ない事由があるときは，省略することができる。
この場合において，「氏名」は，旅券にした署名と同じ文字及び書体で自署すること。